
奴隸のガイアと王女さま。

名ヶ共 隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奴隷のガイアと王女さま。

【Nコード】

N1974P

【作者名】

名ヶ共 隼

【あらすじ】

奴隷制度がある世界の中のアルフォード王国。

その国の辺境で奴隷として育った少年。

ある日、町が盗賊団に襲撃される。

それがきっかけで、第二王女と一緒に旅をすることになった少年。

そして、王女から『ガイア』という名前を貰った少年に、果たしてどんなことが待ち受けているのだろうか――

(1) 出会い(前書き)

はじめまして。名ヶ共です。

どうしても王道ファンタジーを書きたかったので、書かせていただきました。

それでは、どうぞ。

(1) 出会い

魔法が発達した世界。その中のアルフォード王国。

栄光の道を進んできた国だが、当然、悪い部分もある。

奴隷制度。それは人道を踏み外している制度だ。

奴隷は人間扱いされない。

ある者は、死ぬまでこき使われ、

ある者は、死ぬまで性行為をさせられ、

ある者は、ただ遊びのためだけに死んでゆく。

俺の母さんは、奴隷だった。

母さんは、お偉い貴族様の夜枷役だったらしく、それで俺が生まれたらしい。母さんは大層美人だったらしく、奴隷市場では、超上玉と言われていた程だ。

俺は望まれていない子供だったらしく、いつも優しい母さんの後ろに隠れていることしか出来なかった。

しかし、運命というのは、残酷なもので。

母さんは俺が七歳になると同時にこの世を去った。

本当にその時は辛かった。だってまだ七歳のガキだぜ？

だけどその時クソ貴族は、

「うるさい、少し黙らんか。不愉快極まりない」

と、顔に下卑た笑みを浮かべ、そのとき俺は奥歯をかみ締めて、声を出さないように泣いていた。

それからというもの、俺は味方が居なくなり、教育という名の調教を施された。

辛かった。痛かった。そして憎かった。

何故、あんなに優しくった母さんが死ななきゃいけなかったのか。

あの頃は、本気であのクソ貴族を殺そうとした。

だが、やっぱりまだガキ。貴族の周りには絶対ボディーガードがいるし、軽くあしらわれた後、調教されるだけ。

結果、体中痣だらけ。幸い、顔には何もしてこなかった。

十二歳にもなる頃、俺は買出しに行った。

奴隷には、印が付けられていて、着るものもボロ布一枚。履くものなんてあるわけが無い。

やつぱり、奴隷と言う身分は嫌なもので、通っただけで、やれ「腐臭がうつる」だ、「近づくな」やらを言われる。

だけど、ずっと言われ続ければ慣れたもので、気にすることなく買い物をしていた。

するとその時、衛兵の声が聞こえた。

「第二王女殿下のお通りい！」

俺は、こんな辺境にくるわけが無い。そう思っていたので、周りが頭を下げている中、俺は一人、淡々と買い物を続けようとした。

しかし当然、近衛兵さんから注意を受ける訳で。

俺はダルそうにその近衛兵さんの方へと向く。

その時、俺の目には、近衛兵さんと、

第二王女が目映った。

——これが俺の運命の歯車が動き出した時だった。

(1) 出会い(後書き)

子供が主人公だと難しいときいたことがあるのですが、本当なんですか？

(2) ティアって呼んで

「そのどれ……者！ 頭を下げぬか！」

近衛騎士のおっさんの怒声が聞こえる。

しかし俺はおっさんを見無視し、王女を見ていた。

「良いのです。やめなさい」

「し、しかし……」

「良いと私が言っています。やめなさい」

「……はっ」

なんだかんだと言って、仕事はキッチンとこなす近衛兵さん。こっとう人は出世すると思う。

王女さまは乗っている馬車から降りた。

「あなた、名は？」

王女さまが聞いてくる。しかし、奴隷に名など無い。

「俺は奴隷です。名などありません」

俺が答える。すると王女は驚いたように、

「奴隷、ですか」

「姫様、なりません」

……どうやら、奴隷というのには触れてはいけないようだ。

そう思っていたら、不意に王女さまの後ろから、鈍く黒光りするモノを見た。

それはすぐに分かった。それは王女さまの命を奪うためのモノだ

と。

そのモノが投げられた。

危ない！

気が付けば身体が勝手に動いていた。

「くっ、間に合え！」

その黒光りするモノはもう王女さまのすぐ近く。

いきなり走ってきたのに驚いたのか、すぐさま警戒態勢へと入る近衛騎士さんたち。

しかし、その動作はかなり遅かった。

俺は近衛騎士が警戒陣は敷く前にど真ん中を走りぬけ、王女さまの身体を抱きかかえ地面へと倒れた。

「なっ、なにを！？」

さすがにいきなり抱かれたのは恥ずかしいのか、王女さまの声が、耳元で聞こえる。

ちょっといいな……なんて思えたのもつかの間。

その黒光りするモノは、後ろに居た町民の顔に突き刺さった。顔に突き刺さったモノは、他の者に恐怖を与えるには十分だった。ブシャーと、血飛沫をたてて倒れてゆく『町民だった』人。

「ナ、ナイフが……」

誰かがそう呟く。

「……チツ、作戦は失敗だ。ブツ放していいぞ」

恐らく魔法による通信だろう、ナイフを投げた男が言う。それを
合図に、大砲が発射されたような音が鳴った。

そして……

「きゃあ！」

耳が張り裂けそうなほどの轟音。それが何回も何回も。

このままでは不味い。
本能的にそう思った。

絶える事無く鳴り響く砲撃音。

壊されてゆく町。死んでゆく人々。

「ああああああ！」

「じにたぐねええ！」

「うわああああああ！」

数多くの人々が、それぞれの場所で、

ある人は、地面に倒れ、

ある人は、ただ叫び、

ある人は、正気を失っている。

そこは阿鼻叫喚と化していた。

俺はすぐさま立ち上がり、王女さまも立たせる。

近衛騎士が何か言っていたが、砲撃で跡形も無く吹き飛んだ。

「行くぞ！ 走れ！」

「えっ！？ う、うん！」

戸惑ったように王女さまが答える。

俺は必死に王女さまの手を握り、走る。

砲撃が何十発と降ってくるが、全てを避け、走る。

気が気ではなかった。

だが、後ろで手を繋いでいる限り、それがないと、自分自身で確信している。

気が付くと、町の外の小高い丘に出ていた。

町はもう、町ではなかった。

火の海。気が付けばもう夕暮れの空をさらに赤くしている。

一番に逃げたのが俺たちだったようで、あと少し出るのが遅れていたら、あの火の海に飲まれ、命は無かっただろう。

そんな事を思っていた俺に、王女さまが呟いた。

「全滅、か」

恐らく、あの騎士たちのことを言っているのだろう。

「あの近衛騎士さんたちは災難でしたね」

「……いえ、彼らもこういうことだったって覚悟してるよ、きっと」

無理をしているのがすぐに分かる。だがあえて俺はそれには触れないようにした。

「私は、ティスディア・ミル・アルフォード。十二歳よ。あなたは……」

そう言つて、急に黙りこんでしまった。

王女さまを見てみた。

髪は腰辺りまである長い銀髪で、深紅の瞳。気品のある顔立ちで、王族の雰囲気を持っている。

はつきりという……

綺麗だ。

俺と同じ十二歳とは思えない。

だって俺はボロ布一枚に、ボサボサで、汚く濁ったような黒色の髪。火の煤と、元からの汚れでお世辞にも、綺麗とはいえない顔。

唯一、言ってもおかしくないと思えるのは、銀に輝く瞳と、王女さまより背が高いことくらいだ。

そう考えると、どう考えても、王女さまのほうが、よっぽど美しい。

そんなことを考えていると急に閃いたような顔をする王女さま。

「思いついた！ 貴方、今日からガイアって言う名前はどうか？」

急に俺に話を振ってきた。しかし急に話しかけられると焦るもので、

「は、はい！？ お、俺がそんな名前を頂くなんて、俺一応奴隷ですよ！？ こうやって会話することすら罪なのに」

そう俺が言っていると、俯いてしまった。

……俺、なんか悪いこと言った？

そう思っていると、王女さまが急に口を開いた。

「……自分のことを奴隷だなんて思わないでよ。あなたにとってはただの王女さまかもしれないけど、私にとっては命の恩人なんだよ……」

思ったより、悲しそうな声。

「え？」

俺は内心戸惑っていた。

俺はそんなつもりで助けたんじゃないし、そもそも助けたと言う感覚が無い。

そう一人思っていたら、少し、微笑んだかのように王女さまが言った。

「あなたの名前は今夜から、ガイア。

一生懸命考えたんだから、大事にしてよね」

優しい声音。王女さまは目を少し擦り、俯いていた顔を上げた。

「お、王女さま、でも、俺は……」

俺はそれ以上先を言うことは出来なかった。

何故かって？ それは王女さまに口を人差し指で止められたからだ。

「いいの、王族命令。それと、私のことはティアって呼んで。あ、これも王族命令だから」

そんなに簡単に王族の権力使っていいのか？

…… ってちよつと待て。今愛称で呼べって言わなかったか？

無理無理無理無理！ そんな大層なこと出来るか！

「ちよつと呼んでみて」

…… もう後戻りできない。

「ティス、ティア様」

「だめ、ちゃんとティアって呼んでよ」

うう、これでも最善を尽くしたんだが……

「ティア、様。こ、これで宜しいでしょうか？」

「…… だめ、敬語を抜けて」

何だよ、もう！ え、なんだ、もしかして呼んだと勝手に不敬罪とかじゃないよな？

「……ティア」

「うん、ガイア、よくできました！」

そう言っただけに俺に向けられる笑顔。

今までで一番、王女さまが綺麗だと思った瞬間だった。

それと、『ガイア』と呼ばれるのも、悪くないと思えた。

(2) ティアって呼んで(後書き)

此処、おかしいんじゃない？

とか、お思いでしたらすぐに教えて下さると嬉しいです。
前に一度痛い目にあっただ。

それと、

批判や、評価、その他諸々作者に言いたいことがあればいつてやって下さい。

(3) 涙と森に黒さ。

町が滅んだ日、俺は森の中、目を覚ました。
もう朝のようだ。朝霧が立ち込めている。

小便を済ましに行こうと、立ち上がる。

奴隷として仕込まれていたので、必ず朝には早く起きる。

早く済ませようと歩き出す。

「私は……何も……」

その時、おそらくティアのものだと思われる呟きが耳に入った。

そう、本当に小さな呟き。

しかしなぜか、俺の耳には一切の雑音がなく、まっすぐにティアの声が聞こえた。

心配になったので、ティアに近づく。

何故だろう、別にどうということのない行動のはずなのに、心の鼓動がどんどん早くなる。

焦りながらティアへと近づく。

するとティアは、膝を抱え、しくしくというように泣いていた。

「町が……滅んだ……私の、せい……何も、できなかった……」

まだ俺には気づいていないようで、座り込んで泣いている。

今までずっと我慢していたのだろう。一国の王女であるティアが、何も思わず、残念でした、で終わるわけが無い。

それに、王女という常に国に係わってきたので、人一倍愛国心が強い。

それが自分が町に到着した途端に破壊されていく町。

それを自分は見ていることしか出来なかった。逃げることも出来なかった。

しかもいつも自分を守ってくれていた騎士たちが、自分を守るために死んでいった。

するといきなり顔をはっと上げ、驚いたような顔をするティア。

目には透明の水がめいっぱい溜まっており、瞬きをするたびに、スルリと下へ落ちていく。

その透明の水はその綺麗なティアの両頬を伝い、顎の下でぽたぽたと滴り落ち^{した}た。

その間、約十秒ほど。

ティアは俺だとしっかりと確認すると、焦ったように目を擦りこちらに顔を上げる。

「な、なんだあ、おきてたんだ」

声だけは普通にしようとしているようだが、その震えた声と、赤く腫れた目を見れば、誰でもつい先程まで泣いていたと言っのが分かってしまう。

だけど俺は、なにも出来なかった。

赤の他人の俺が、仕方が無い、なんていつてみる。ティアの気持ちも知らずにそんな無神経なことは言えない。

他にもできることはいっぱいあっただろうが、結局俺は何も出来なかった。

……結構俺って、意気地なしなんだな。

その時、初めて情けないと思った瞬間だった。

「……お腹減ったね、ガイア」

そう訊ねてくるのはもちろんティア。
しかしまだ朝の雰囲気は消えておらず、朝よりも無理をして明るく振舞っているような印象を受ける。

「そう、ですね。ティア……様」

「もう、敬語は抜きて言ったのに」

そう、俺はまだ敬語が抜けていないのだ。

ティアは敬語抜き、などと言っているがそんなに簡単にとれない。王女さまなのだから、抜けるわけが無い。

というか、これは奴隷として調教されてきたモノの一つだ。

『ほかの者には必ず敬語で答えよ』

というモノだ。

これはガキの頃から受けていて、軽いトラウマだ。

と、今問題になっているのは、食料、水、そして……

「ガルウウウ……」

「っ！ 魔物か！ 逃げるぞ、ティア！」

「う、うん」

防衛手段。

町の外に出ると必ずと言って良いほど魔物と遭遇する。ティアの護衛が多かった理由の一つでもある。

本当のことを言うと、俺はこっそりと魔物図鑑を見たことがあるだけで、町の出入り口を知っていても、町の外には出たことが無かった。

今日の朝、初めて魔物と遭遇した。こっそりと図鑑を読んでいなかったら、必ず混乱していたと思う。

幸い、この魔物は俺たちを追ってこなかった。

理由は分からないが、幸運だったと思う。

……ドサクサに紛れてティアと呼んでしまったが、そこはまあ、大丈夫だろう。

「はあ……はあ……」
「はあ……はあ……」

魔物が見えなくなっても走り続けたので、俺もティアも息を切らしている。

そこは開けた道、つまり街道だった。

昨日、気が付けば丘の上にいて、今までずっと道の無い道を歩いたきたので、久しぶりの道だ。

……森の中、というのは変わりはないが。

森の中はもうウンザリだと思っていたら、急にティアが細い声で俺に言った。

「……ごめんね。私が魔法を使えたら……」

魔法。

それはあらゆる幻想を想像し、魔の力を願うことで物質化する業^{わざ}。詳しくは知らないが、捨ててあった本に書いてあった。

「そんな。ティア様に疲労をかけるわけにはいけません」

やっぱりティアを危険に晒すわけにはいかないしな。

「で、でも」

「いいんです。魔法って使うと危険なんでしょう？ 見ていれば分かります」

何度か、ティアの魔法を見たことがある。

ちよつとしたこと（火をつけるなど）なら何も変わりが無かった

が、今日の朝、初めて魔物と遭遇したときにティアが魔法で倒していた。

しかし、その時は少しだけだが、ティアの顔に疲れが浮かんでいた。

今までの行動のせいもあるだろうが、魔法を使った後と、その前では明らかに様子が違う。

さっき魔物から逃げてきたときもかなり辛かっただろう。

「ほら、もう森を抜けます。いきましよう」

俺がそう言う。

町がどの辺りにあるのかはティアしか知らないが、日の光が見えるので、もうすぐ抜けるだろう。

ティアはまだ疲れた顔をしていたが、こちらを向いて、

「うん」

と辛そうな顔で、すぐに無理をしているのが分かる笑みで言ってくれた。

……こんなときじゃなかったらかなり可愛かっただろうなあ。

と、不謹慎なことを真剣に考えた。

「……よし、通っていいぞ」

門番の声がぶっきらぼうで単調な声が聞こえる。
かなり面倒くさそうで、やる気の無さが伺える。

「着いたのかな？ 町に」

ティアが俺に聞く。しかしその声は元気が無く、疲れしか含んでいない声だ。

「そう、みたいですな」

だがあえて俺はそのことは聞かない。
だって聞いたらまた無理して明るく振舞うだろうからな、俺はそういうのは嫌だ。

「早く入ろう、ガイア？」

俺は頷く。

この町はけっこう大きいと感じた。
俺の住んでいた町が小さかったのだろうが、やっぱりこう、他の町ってだけでワクワクしてくる。なんだろうか、こんな気持ちになったのは初めてだ。

そんな俺の気持ちをよそに、次々と旅人や商人などが町の中へと入っていく。

この町は門番の検問を抜ければ入れるらしく、すらすらと、まではいかないが、それなりに早く人が門の中へと入っていった。

「はい次い……なんだ、小汚ねえガキ二人じゃねえか。……ふん、名前は？」

門番の態度にムスツと表情を曇らせた。もちろんティアが。

しかしこのまま入れないという訳にはいけないので、名乗る。ティアが。

「ティア・ルフドです」

王族、ということとで、フルネームは不味いと考えたのだろう。しかし考える素振りは見せず、すぐに言った。

「ティア・ルフドと……そっちのガキは？」

しかし、俺はそうもいかない。

何度も言うようだが、俺は奴隷だ。……今はだっただの方が正しいか。

どちらにせよ、俺には腕に印が刻マークまれている。

相手に気づかれていないというのは幸いだが、このままだと怪しまれて刻印が見つかるかもしれない。今は主がいらないから主に掛けられた制約の魔法はないが、このままだと奴隷屋か、奴隷商人に売り飛ばされるだろう。

そう悩んでいるうちに門番も怪しくなってきたようで、イライラ

を見せ付けるように足をトントントンと動かして地面を叩いている。

本当に困っていると、不意にティアが口を開いた。

「もう、兄さんしつかりしてよ。」

……「ごめんなさい、こちらは私の兄で、ガイア・ルフドです。何故だか緊張しているようで」

恐らく今俺は驚いた目でティアを見ているだろう。しかし、思わぬ助けが入り助かった。

「ふうん？ この奴隷みたいなガキが兄さんねえ？ 全然似てないが？」

もつともなところを衝かれた。確かに、似ていない兄弟で格好すら違うというのはかなり怪しい。

しかしティアは、

「その、言わないといけないんですか……？」

恥らったような上目遣い。いくら子供で小汚いといっても、元の容姿の格が俺とはかなりのレベルで違うので、恐らく門番は顔を真っ赤にしてよく訳の分からない罪悪感に責められているだろう。

現に、隣に居た俺もドキッ、つとした。

「わ、わかった、と、通れっ」

門番が焦って言う。何だか門番が少しだけ、可哀想になった。

それと、なんとなくティアの黒さが分かったような気がした。

(3) 涙と森に黒さ。(後書き)

タイトルごめんなさい。

これ書くのに三日ぐらい掛かりました。

皆さんってどのくらい時間を掛けて書いてるんですか？

やっぱり自分の頭の無さですかね？

と、最近考えてます。

(4) ギルド(前書き)

今回は地味かもしれません。

(4) ギルド

ここは町の中の広場。

真ん中には噴水があり、その後ろに並木道が続き、それと一緒に出店がたくさんある。

少し暑い太陽の光。それに負けじと店の人もお客をめぐって熱い戦いを繰り広げている。

ある人は大きな声で客寄せし、

ある人は一人一人声をかけ客寄せしている。

どちらにせよ、此处は活気があり、その騒音はうつつしいとは感じず、逆に少しの笑みが出てくる。

「ふう、無事町に入れた。ね？ ガイア」

俺に質問をしてくるティア。だけどあれは反則だったような……

「そう、ですね」

「敬語はナシ！ 少なくともこの町では兄妹としているんだからね」

そうだった、勝手に兄妹ってことにされたんだっけ。

「分かりまし……分かった」

ダメだ、緊張する。慣れない口調はダメだ。

そうやって一人焦っていると、ティアがクスクスと笑った。本当に可笑しかったようで、少し恥ずかしくなった。

「なにか、可笑しかった？」

そう問いかける。でもこの言葉を言ったときも絶対に顔が赤くな
ったと思う。

「いや、ガイアがそう喋るのが珍しくてさ、いつも敬語だったか
ら。でも私は敬語抜きの方が良いんだけどね」

ふう、と一息つく。そしてしばらく間を空けてまたティアが言う。

「さて、こうして町には無事入れた訳ですが、また新たな問題があ
ります。それは何でしょう？」

人差し指を立てて、首を横へ捻る。

どんな行動をしても可愛いんだな、とまた不謹慎なことを考えて
いた。

それに見とれている間、約五秒。

「早く答えてよ」

質問されていたのをすっかり忘れて、その行動ばかり見ていたせ
いで、怒られた。

なんとなく悪い気がしたので、マジメに考え、その答えをティア
に告げる。

「お金が無い？」

「そう、お金が無いの。これじゃ宿にも泊まれない」

「ごめん……宿って何？」

宿、と言う聞いたことの無い単語が出てきた。なにか便利な物のだろうか？

「……それ、本気で言ってる？」

若干引き目で見られながらティアに言われる。

だけど知らないものは知らない。宿って言葉聞いたことないし。

「……本気だけど？」

「まあ、いいわ。考えればガイアそういうことを知らないのは当たり前だもんね。

宿って言うのは、お金を払ってそこに泊めてもらうこと。分かった？」

「……だいたい」

「ならよし。で、だからお金がいるの。で、お金を手に入れようと思ったら、なんでしょ……」とそうだった、ガイアは知らないんだっけ」

そうだったそうだったと、ばつの悪そうな顔をした。

なんとなく申し訳の無い気持ちになった。

「お金を手に入れるのは、稼げば良いんだよ。つまり、ギルドで稼げば良いの。ってことでいいこう！」

ギルドって何。

この俺の疑問に恐らくティアは気づいているだろうが、ティアは口にしなかった。

目の前には年季が入った木の建物。

そこに入っていく人は、身体の高い人やひよろつとしている人など様々。

共通して言えるのは、みんな剣や槍、杖や弓などで武装していることだった。

どう見ても場違いなその建物に、ティアは怯む事無く入っていく。

その後を俺は慌てて追いかける。

「さて、ここがギルド。っていつでもここは色々複合しているみたいだね」

慌てて追いついた俺に歩きながら言うティア。

そこはかなり広く、綺麗ではないが、かなり汚くは無い、ただ少し汚れている場所だった。

ところどころに邪魔にならない程度にたくさんのテーブルやイスがあり、そこで食事をしている人もいた。

二階に繋がっている階段もあり、そこから出てくる人や、逆に入っていく人もいた。

気が付けば受付だと思われるところに来ていた。

その受付の金髪の綺麗な女の人が笑顔で優しくティアに言った。

「こんにちは、フェルレン支部へようこそ。どんなご用件ですか？」

あ、この町ってフェルレンっていうんだ。

「彼の登録をお願いしたいんだけど」

ぶっきらぼうにティアが言う。だけど嫌な感じはしなかった。

「分かりました。ではこちらに必要事項を記入してください」

そう言って渡されたのは羊皮紙とペンだった。

羊皮紙の方には何かが書かれていたが、読めない。

そして読めないのだから書けるわけが無い。

そうやって困っていると、受付の女の人が困ったようにやはり優しい笑いを浮かべながら俺に言った。

「あの、宜しければ、私が書きましようか？」

「あ、ごめんなさい」

反射的に謝ってしまった。なぜ謝ったのか自分でも分からないが。

「では、こちらから質問させていただきますので嘘偽り無くお答えください」

嘘偽り無く、のところでドキツとした。もうこの時点嘘についているのだから。

「お名前は？」

「ガイア・ルフドです」

「年齢は？」

「十二歳」

「はい、完了いたしました。ちょっと待っててね……」

かなり簡単な質問で、少し拍子抜けしてしまった。まあ、助かったが。

奥に行った女の人に戻ってくるのはすぐだった。

そして、何か刻まれた薄い鉄のカードを持って戻ってきた。

「これがギルドカードとなります。損失した場合はランクが低い場合は再発行いたしますのでご安心ください。ただし、ある程度ランクが高い場合は残念ながら再発行は致しません。ご注意ください」

らんくやらぎるとかあどやらよくわからないが、失くさないほうが良いということは分かった。

「では次に、ギルドについてご説明致します。ギルドとは、簡単に言うと様々な依頼を解決するところです。そして解決していただくのはあなた方です。

誰でも登録することは可能なのに対して、依頼するにはお金が必要

です。ご注意ください。
今登録していただいたので貴方はいまのランクはFです。ですので最下位ランクとなります。
以上で基本的な質問を終了いたします。他に聞きたいことがあればいつでも聞いてください」

……な、なんというか、凄い説明が早かった。

「ホラ、終わったからいこう？ 兄さん」

あ、ここでもやるんだその設定。

そして後ろを見るとちっちゃく女の子の人が手を振ってくれた。

……ちよつとだけ恥ずかしくなった。

引っ張っていかれたのは大きな掲示板。

ランクごとに分かれてはいるが、少し乱雑に張られている。

「ええと、これで十分だね」

そう言って手に取ったのは店の掃除というどう見ても雑用としか思えない依頼だった。

だけど、文句があるわけではないので、何も言わない。

ティアはそれを受付の方へ持っていった。

「あれ、戻ってくるのお早いですね。ええと、この依頼でよろしいですか？」

「はい、お願いします」

「……依頼受諾を完了いたしました。今日の夕暮れまでに済ませて下さい」

そう女の人が言い終わると、ティアが出口へと歩き出した。

そして俺はそれを慌てて追いかける。

追いつき、そのまま外へ出ようとした時、どこからか声が聞こえた。

「おい！ みんな、汚ねえガキとお上品なお嬢ちゃんがいるぜ！
ん？ よく見ると奴隷じゃねえか！」

奴隷、と言う言葉にティアはピクツとした。

舌をかみ締め、手を握り締め、今にも爆発しそうだった。

……俺にはその理由が分からなかった。

(4) ギルド(後書き)

結構自分の都合で喋っちゃう王女さま。

それと、

ファンタジーと言えばこれかな、と。

(5) 宿(前書き)

更新遅れてごめんなさいっ！

(5) 宿

「じゃ、よろしくね」

おばさんから渡されたほうきを手に取る。

おばさんは俺たちがほうきを手に取ったのを確認すると、忙しうに表向きの店へと入っていった。

掃除の依頼というので、少し汚れているぐらいかと思っていたんだけど、これは……

「……ゴミ屋敷？　ここは」

ティアが言う。

俺は慣れていたのでもって不快ではなかったが、ティアはそうもいかないようだ。

見るからに嫌そうな顔をして、立っている。

表向きは普通のお店だったのだが、裏の方は酷い。

よくわからないが、とにかく不快な異臭がして、歩くのもやっただ。

どうしてこうなるまで放置していたのだろう。

どうしようもない不快感が漂う中、ティアが口を開いた。

「と、とりあえず依頼なんだしはじめようよ、ね？」

「……うん」

そう言って、俺はズカズカと中心部に入る。

ティアはそんな俺をあまりよくない目で見ていた……気がした。

「お疲れ様でした。こちらが報酬の銀貨二枚です。これからもあなた方の活躍を期待しております」

受付の女の人が銀貨を出した後に、言いなれたように言葉を足した。

ティアは銀貨をサツと素早く取り、サツサとギルドから出た。

宿はギルドのすぐ側にあり、建物も大きい。
近いのでティアはすぐに宿へと入った。

「あの、ここの宿で一番安い部屋つてありますか？」
ティアは入った瞬間に受付と思われるヘンな本を読んでいるおじさんに話しかける。

「ん？ ああ、あるが」
おじさんは本を見ながら面倒くさそうな声で言った。

「じゃああの、その部屋でお願いします」

ティアがそう言うと、パタンと本を閉じゆつくりとこちらを向く。

「ん、ああじゃあ銀貨一枚——」

しかし、こちらを見た後に明らかにおじさんの表情が変わったのが分かった。

正確には俺を見た後。

明らかに嫌そうな、そして軽蔑しているような声で言う。

「——ここは奴隷お断りだ。店が腐っちまう。出て行きな」

ああ、俺が奴隷だから嫌そうな表情をしたんだな。
と、一人で納得している。

奴隷を毛嫌いする人は多い。

俺が買出しに行くときはいつもそうだった。

その多くは、『くさい』、『近づくな』、『腐る』などだ。

俺は生まれたときから奴隷だったので、特に気にならない。
むしろ——

——『当たり前』だとも思う。

しかし、ティアはそうでもなかったようで

「ど、奴隷じゃないです。あ、兄です」

少し動揺したような口調で言う。

今までこの設定で何とかなってきしたが、このおじさんには効かなかったようだ、

「見た目も違い、来ている服も天と地ほどの差があるのをどう信じるっていうんだ？」

先程よりもさらに眉間に皺を寄せて言う。

迫力があり、俺はその剣幕で動けない。

それはティアも同じようではつが悪い表情をしている。

「やっぱり奴隷だったんだな。嬢ちゃん一人の滞在はまあ認めてやっても良いが、奴隷のクズガキまで泊める義理は無い。さあ、出て行け」

おじさんが言っていることも分かる。だって俺は『奴隷』なんだから。

「わ、分かったよおじさん。ティア、俺は外でもどこでも寝られるから、一人でヤドに泊まって——」

「——奴隷だって人なんだよ」

俺ができるだけにこやかにいうと、ポツリと小さな呟きが聞こえた。

それがティアのものとすぐに分かったが、なぜかティアは俯いて震えている。

どうした、と思った瞬間――

――ティアが目いっぱい涙を溜めて、おじさんの方を向き、いつもでは考えられないほどの怒りがこもった怒声で言った。

「奴隷だつて人なんだよ！？　なのに何でそこまで毛嫌いするの！？　何で宿に泊まらないの！？　何で人として見られないの！？　ねえ何で？　何で？　何で！？」

本当に大きな声。

そして悲痛な叫び。

それが俺の待遇に対して言ってくれているのが分かった。

だけど……何故だろう。

今までは少しも気にしなかったことなのに、今は体中に衝撃が走った位の驚き。

驚いたのはおじさんも同じようだが、すぐに表情を戻し、動揺の混ざった声で言う。

「……銀貨一枚だ」

小さな声。だがはつきりと聞こえた。

するとティアは小さな声で

「……ありがとう」

と、怒りも若干こもった声で呟き、銀貨を台に叩きつけ奥の階段へと上っていった。

「……さっきはごめんね。ガイアの気持ちも考えないで」

ティアが窓際のベッドに座っている状態で言う。

今は夜で、少し暗いが、月の光が信じられないくらい部屋の中に入り、見えないと言うことは無い。

部屋は狭く、屋根裏部屋で少し汚い。

しかし俺は部屋をとれたと言う方が信じられなくて、部屋の汚れなど気にならない。

しかし俺は、ティアが俺に謝るのがおかしいと思った。

「なんで謝るんですか？俺のためにやってくれたんでしょう？」

「……敬語はダメって、言ったでしょ……………」

少しの笑みを浮かべながら俺に言う。

その表情はひどく優しく、ずっと見ていたいと思える笑み。だけどそれと一緒に、上っ面だけと言うのが分かってしまう。

「……ごめん」

そんなティアに複雑な気持ちを抱えつつも、俺は謝る。

だが、俺は言葉を続けた。

「だけど、俺はそんなに必死になって言ってくれるティアを見て、
なんというか、その、う、嬉しくなった、んだ」

……続けたのは良いが、うまく言葉が出てこなくて、言ったあとはなんとなく恥ずかしくなった。

「えっ？」

そんな俺に少し戸惑ったのかとティアは驚いた声を出したのだが、
急にティアは嬉しそうに表情を変え、若干の笑みを浮かべながら俺
に突然言った。

「……ねえ、明日服を買いに行かない？」

「服？」

「そう服」

「何のために？」

「何のためにつて……さすがにこの身なりのままじゃ不味いでしょ」

そう言われて俺は自分の格好を見た。

……見た限りでは悪い点は見当たらないが。

「ガイアも私もこの格好じゃ困るの。色々と」

いまいち納得できなかったが、ティアが言うのだから無理に逆らうことは無い。

「……………ティアが言うならいいんだけど」

「それじゃ、私は寝るね。おやすみ。……………あ、ガイア寝る前には顔洗いなよ？ それじゃ」

そういつと毛布を被り、向こうを向いてしまった。

顔を洗え、と言われても洗う場所が分からないのではどうしようもない。

仕方なく、壁に背を預けて座って寝ることにした。

「……………おやすみなさい」

俺が一人で小さく呟く。

……………ティアからおやすみと小さく寝言が聞こえて、それにかなりドキッとしたのは内緒だ。

(6) 服

どすつと何かが倒れた音がしたのと同時に、鈍い痛みが俺を襲った。

その音は俺が倒れた音だと気づき、ゆっくりと自分体を持ち上げる。

ボンヤリとしていた意識が覚醒していく。

そういえば、昨日ここで寝たんだっけ……

そう思いつつ、ベッドの方へと視線を向ける。

昨日そこに居たはずのティアの姿は無く、綺麗に整えられたベッドがあるだけだった。

どこ行っただ、と思いつつも、立ち上がりドアへと向かう。

部屋の外へ出ようとドア前へ立つ。

そしてドアノブへと手を掛け、そのドアを押す。

途中、変な感触があり、そこでドアノブから手を離れた。

その後、触っていないのに勝手にドアが開き始め、そしてついにドアの向こうにあったものが見えた。

「あ……ティア」

そこには怒ったような表情をしたティアがいた。

途中の変な感触はティアがドアにぶつかった音だと気づくと、なぜかここに居ては危ないという危険信号が俺の中でのすごい音を立てながら鳴る。

「……いたあ」

ティアの小さくない声が俺の耳に聞こえる。

「あ、ああ……」

俺は何か分からない恐怖感に対して声が出た。

そしてティアがニツコリと笑うと強烈なダークな雰囲気^{雰囲気}がティアのほうから漂^漂ってきて……

「ぎゃああああ！」

そこで俺の意識が途切れた。

「ねえガイア？」

「……なに？」

二度目の目覚めを経て、しばらくした後。

余り時間は経っていないようで、少し太陽の光が強くなっただぐら
いだ。

俺はティアの問いに対して、不機嫌な声で答えた。

「まだ怒ってるの？ ごめんって言ったじゃない」

「そうじゃなくて……もういい」

俺は心のモヤモヤがまだ残っているが、キリがないと思い、俺の心が折れた。

「で、何？」

出来るだけ穏やかに言っただけだが、少しきこちなくなっってしまった。

ティアはそんな俺を諦めたように見て、話し始めた。

「あのね、言いたいことは幾つかあるんだけど、まずガイア顔洗った？ 昨日と変わってないような気がするんだけど？ それとさつさと服を買い終えて色々と揃えておきたいから、早く買いに行きたいんだけど、ね？」

さいごの「ね？」に、小さな恐怖を感じつつも、俺はティアに話す。

「昨日と変わってないって……当たり前だよ。顔洗ってないもん。というか場所が分からなかったからさ……」

だんだんと声が小さくなっていき、何だか恥ずかしくなってきた。自然と顔が熱くなる。

ティアはクスクスと鼻のところに手を当てて笑うと、俺の方へと向き微笑みを向けた。

「そっかそっか、だから変わってないんだ」

「……悪かったな」

「フフフ、おいで、案内してあげる。時間が無いから早くしてよ？

……ホラ早く」

そう言ってティアは俺の手を握り、無理やり俺を連れて行く。
ティアはなぜか楽しそうだった。

初めて綺麗な水で顔を洗った俺は、ティアに連れられるままに店へと向かい、いつの間にかその店の前に着いていた。

しかしその店は、この町の裏側とも言われる裏通りの気づき難い場所であり、しかもボロボロで、一度では服を取り扱っているとは分からない程の見た目だった。

何故こんなところに来ているかには色々と理由がある。

まず、表通りの店には行っただけ、とても銀貨一枚で買えるような服は無かった。

だけどティアは予測していたようで、

「仕方ないなあ……」

と、一人ぼやきつつ、裏通りへと足を運び、

今に至る。

店の中へと入ると、キセルを加えたショートヘアの落ち着いた雰囲気
の女店主と思う人が声をかけてきた。

「いらつしゃい、ところで、アンタたちは物好きかい？ それとも貧乏かい？」

店に入るなり、失礼なことを言う女店主。

店主としてダメだとは思う……物売る気あるのか？

だがティアは極めて冷静に、言った。

「貧乏です。だから銀貨一枚以内でこの子の服を買いそろえたいんだけど」

ティアは俺の方へと指を指す。

女店主はキツパリとティアが言ったのがツボに入ったのか、急に大笑いしはじめた。

ひいひいと、苦しそうだったのがある程度収まると、店主は言い始めた。

「そうかいそうかい！ いやあ、そこまではつきり言ったヤツは初めてだよ！ 気に入った！ ある程度まけてやるよ！」

「あ、ありがとう……？」

ティアは思いもよらない展開に少し困惑ぎみにお礼を言うと、俺の方へと向く。

「と言われても……どうしようか？」

手を顎に当て、首を少し捻り言うティア。

だがその顔はニヤリとした笑いが浮かんでいた。

……何故だろう、嫌な予感しかない。

「はい、銀貨一枚」

「まいどあり！」

「……なんかすつごく疲れた」

疲れた。ほんとに疲れた。

いったい何着着ただろうか。

今の俺の格好は、とりあえず、丈夫さを重視した靴、下に黒いズボンに、シンプルなどこにでもありそうなベルト、薄い黒い生地の上着に地味めの動きやすいジャケット。その上にマントだ。

ティアはというと、これまた丈夫さを重視したブーツに、丈の短いスカート、薄い長袖の服の上に、特に目立つたところがないコートだ。

どれもこれもすべて一番安いものだが、どう考えても絶対に銀貨一枚じゃ足りない。

「ねえ、銀貨で買ったのは嬉しいけど、なんでこんなにまけてくれるんだ？」

俺は多少不安を抱えながらもどうしても気になったので思い切って聞いてみた。

女店主は答えてくれるか疑問だったが、大したこともなく、普通に答えた。

「だから、気に入ったからさ。それに、こんな所に店を構えてるからね、お客も少ないんだよ。アンタたちはその数少ないお客の中の一人ってことだね。あとね……」

「あと？」

俺は一度とまった言葉の続きを追求して聞く。

「アンタたち訳アリみたいだからね？ ま、理由は聞かないけどね」

そう女店主は言うと、ニヤニヤとした笑みで俺たちを見た。

「なっ……」

ティアが急に声を上げた。

と思うと、急に顔が赤くなっていく。

あまりの変わりっぷりに、少し困惑していると、ティアが急に、

「ガイア！ 早くいくよ！」

「えっ？ ちょ、ちょっと！」

なぜかティアに手を引かれ、慌てて店の扉へと走った。そのまま扉へと一直線で、店を飛び出すと、思ったが。

「あ、ありがと！ お姉さん！」

自然と口から感謝の気持ちが出てきた。

まだ訳が分からないが、自然と笑みが沸いてくるのが自分でも分かった。

ティアはまっすぐと、前を見ていて、銀の髪をたなびかせて走っている。

ただ、この角度からでも、ティアの顔が赤いと言ったのが見えた。

なぜ顔が赤いかは分からないが、それが可愛いと思えた。

(6) 服(後書き)

言い訳するつもりはないです。

二ヶ月も間をあけて本当にすみませんでした。

この作品を読んでいたいただいた全ての読者様へ深くお詫び申し上げます。

(7) 決意

俺とティアは服を買った後、雑用の依頼を二つこなし、銀貨五枚を手に入れ、そのまま宿へと帰った。

もう辺りは暗くなりかけており、町は昼とはまた別の、なんというか、オトナの雰囲気になってきている。

宿へと入ると、昨日と同じおじさんがいた。

ティアはおじさんを見るとムツと表情を曇らせ、かなり不機嫌な声で、おじさんへと声をかけた。

「ねえ、おじさん」

「ん……？ なん……」

おじさんは昨日と同じく、読んでいた本から目を離し、俺たちの方へと視線を傾けた。

しかしこちらを向いた瞬間に、おじさんが驚きの声を上げた。

まあ、当然だろ、身なりが昨日とは全然違うからな。

おじさんはまだ驚きの表情を変えないまま、俺たちに用件を聞いた。

「そ、それで何のようだ？」

「いや？ 私たちにご飯を出していただけなのか聞きに來ただけな

んだけど？」

感情のこもっていない冷たい声でティアが言う。
ホントに嫌いなんだな、おじさんのこと。

「お前たち、たった銀貨一枚でメシにありつけると思ってたのか？
部屋貸してやってるだけ感謝しろ！」

なんか、意地が悪いな……

「へえ……？」

「な、なんだよ」

ティアは意味ありげな言葉を出した。

それを聞いたおじさんは、またもや動揺し、うつすらと汗が出ているように見えた。

ティアはその様子を見ると、至って変わっていない様子で、先ほどのように冷たい声で言った。

「そうなんだ？ 私は今朝食堂に行ったのだけれど、そこでは普通に食事をさせてもらったけど？」

「っ……」

ティアは一層冷たい目でおじさんを見ると、その冷たい目を変え
ることなく、もう一度おじさんに問いた。

「もう一回聞くけど、私たちにご飯を出して頂けるのかしら？」

ティアはもう、汚物を見るような視線を宿のおじさんに向けた。
おじさんは良くない顔をして、俺たちに諦めたように言った。

「……ああ」

「そう、なら良かった」

ティアはやっぱり冷たい声でおじさんへと言い、そのまま、屋根裏の部屋まで登っていった。

俺はそれについて行き、途中、おじさんの方へと振り返った。おじさんはこっちを恨めしそうに睨んでいた。

……俺は見なかったことにした。

「やっぱり嫌い。あの人」

ティアがポツリと言葉をこぼした。

俺はそれを聞き逃さず、ティアに聞いた。

「なんで？」

「……だって、やっぱりガイアを汚いモノ見るような目で見るんだもん。私はそれが許せない。それに意地悪してきたし」

ティアは先ほどの冷たい目とは打って変わって、怒ったような、それでいて泣きそうな表情をしている。

俺はそんなティアを見て、何だか笑みがこぼれた。

理由を分らないが、かけるべき言葉はわかっている気がする。

そして俺は、わざと思い出したように、ティアに言った。

「……ああつ！　そういえばティア、あのおじさんに、『今朝食堂に行って食事をした』って言ってたよな！？　俺食ってないぞ！」

俺はティアにそう言つと、ティアは申し訳なさそうな表情を、一瞬、そう、一瞬すると、その後は無邪気な笑みへと変えた。

「いいじゃない、今日から食べられるんだからさ？」

「良くない！ 今日どれだけ朝がしんどかったか、ティアわかってないな！？」

「あれは……あなたがもっとドアをゆっくり開ければいい話じゃない！」

「自然に話を変えようとするな！」

俺とティアは言い争ってはいるが、俺とティアは少しずつ自然な笑みが溢れてきていた。

俺はそれが楽しくて堪らなかった。

「さてガイア、顔は洗った？」
「洗った」

「ご飯は食べた？」

「顔洗う前に一緒に食ったろ」

「寒くない？」

「ちよつと寒いけど、我慢できるレベル……さっきから何なんだよ、話があるなら早く言え」

「ああ、うん、そうする」

「ご飯を食べ顔を洗った後、さあ寝るかという時に、ティアから」

ちょっと話があるからきてね」と言う誘いというか、命令？　ちょっと違うか。まあそう言われ、部屋に戻って来たのだが……。
ティアからの、しつこい質問に、少しウンザリしていた。

「えっとさ、私王都に帰りたいの」

ティアはベッドの上で両足をハの字にして座る……女の子座りっ
ていうのか？　まあ、そういう座り方をしていた。

「えっと、それは当たり前だろ。ティアは王女なんだからむしろ帰
らないとダメなんじゃないの？」

「いや、そういう意味で言ったんじゃないくて、その……」

何故かティアは俯いて、ボソボソと言っているように見える。

……なんなんだ？　さっきからはつきりしないな。

「……わ、私は」

気のせいだろうか。ティアの顔が赤くなっているように見える。

「うん？　どうした」

俺は出来るだけ明るく言う。

何故明るく言ったのは俺も分からない。

「……察してよ」

ティアはまだ俯いて、時々こちらを伺うように見る。

ティアがボソッと何か言ったような気がしたが、何を言っている
かまでは聞こえなかった。

別に鬱陶しいとも思わないが、ティアが何を言うのかは気になる。

ティアは決心したように、俯いていた顔を俺に向けると、大きな
声で、それこそ部屋全体に響くぐらいの声で、俺へと言った。

「……私は、ガイアと一緒に王都へ行きたいのっ！」

……ええと？

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと！　どういう意味だよそれ！？」

一瞬なにを言われたのか分からなくて、自分でも分かるくらい、ポカーンとしてしまったが、その後俺は言われたことをすぐに理解した。

余りにも驚きすぎて、全ての行動が一度停止した。

「……言葉の通りだよ。私はガイアが、その、心配なんだよ。下手をしたら、前の、ガイアの主人を殺したことで重罪になるかもしれない。ホントはそんな事をやっていなくても、奴隷っていう身分だけでそうなる。そう、そうだよ、私はガイアが心配なんだよ！」

……なぜかティアは言っただけで、とでも言いたそうなの、なんともいえない笑顔で俺を見た。

その笑顔で、一気に上下の立場が対等ではなくなってしまった。

……いや、対等なんだけれども、そんな勝ち誇った笑顔をされることと断ることも出来なくなるだろ。

俺はティアのその言葉がその場で思いついた言葉であっても、俺は嬉しかった。

その嬉しい、と言う気持ちは何なのかは俺にも分からないが、ティアが王都につくまで、一緒に行こうと思った。

フフツ、と俺は不意に笑みがこぼれた。

何だろう、何故が嬉しくて堪らない。

「ガイア？」

ティアに話しかけられ、俺はハツとすると、ティアは不思議そうな顔をしていた。

そのティアの表情は俺の答えを待っているような、表情だった。

「……ティアがそう言ってくれるなら、喜んで一緒にいくよ」

俺はワザと呆れたように、両手を左右にやり、首を横に振った。それを見たティアは、クスクス、と笑った。

何か可笑しかったか？

俺は少し心配になったが、ティアは純粹にその様子が可笑しかったようで、次に顔を上げたときは、満面の笑みで、俺へと向いていた。

そして少しの間が開き、ティアが俺に話し始めた。

「それじゃ、ガイアは一緒に来てくれる、ってことだね」

「ああ」

ティアは俺がそう言ったのを見ると、ここから本番、という雰囲気を出し始め、話し始める。

「ねえガイア。王都までは旅をするしかないと思うの。お金もないし、第一こんな子供二人を王都まで送ってくれる人はいない。見返りもないしね」

それはそうだ。

こんな子供二人を乗せたところで、何の得にもならないし、お荷物になるだけだ。

「でもね。一つ、私たちが損するどころか、得をしながら王都へ行ける方法があるの。何だと思う？」

俺たちが得をして、尚且つ王都まで行ける方法、そんな都合の良い方法なんて……あった。

今思いついた中で一つ、条件を満たしているものがある。

「ギルド、か」

「……そう、ギルド。ギルドなら護衛依頼なんていくらでも転がっていると思うの。問題があるとすれば、ランクと……」

「ランクと？　なんだ」

俺は疑問の感情をたっぷりと言葉に塗りつけてティアに言う。
ティアは俺が言ったのを確認すると、真剣な表情を少し崩し、俺に言った。

「戦闘能力ね」

（幕間）ある部屋で

そこには、見るからに一級品の衣服を纏った、茶の髪に、髪と同じ色をした髭、鮮やかな赤の瞳を持つ、男らしい中年の男性。

それにゆつたりとしたドレスを身に纏い、長く美しい銀の髪に、穏やかな蒼色の瞳を持つ、美しい女性。

二人とも何故か暗い表情で、何かを待っていた。

突然、コンコン、とドアを叩く音が部屋に響く。

二人は少し表情を変えつつも、男性が低く男らしい声で言う。

「……入れ」

そう男が言うと、静かに木製のドアが開く。

「失礼します！」

ドアから入って来たのは、二十代の前半くらいの鎧を纏い、少し長い髪を後ろで束ねた若い男の騎士だった。

「……どうした？」

やや間を空けてから男はその若い騎士に、重く低い声で問う。

何を話すのかは分かっているようだったが、男はあえて若い騎士へと言い、その騎士は自分の姿勢を正して、硬くなりながらも男へと話した。

「……ご報告します。我々搜索騎士隊は町に向かった所、町は廃墟と化していました。」

町を調べたところ、町民はゼロ。領主官邸も焼き払われていました。私たちが調べたところでは町民は遺体でしか見ていません。

その中に第二王女殿下の近衛騎士隊の遺体を発見しました。遺体は

全て回収し調べさせましたが、遺体の全てに、剣や弓、銃に爆発などの外部からと思われる傷がありました。致命傷でした。恐らく大規模な山賊、もしくは盗賊に町を襲撃された可能性が高いです。いえ、山賊ではないでしょう、あの周辺は主要施設が近いので騎士が必ずそのような輩を取り締まっているはずですが、もしかもし他国軍が攻撃をしたとしても、攻撃する理由が分かりません。しかし……」

鎧を纏う若い騎士はそれまでの淡々とした報告の違い、急に言葉を濁し、齒切れの悪そうな顔をする。

「しかし、なんだ？」

男は若い騎士にはつきりとした言葉で言う。

若い騎士は、一瞬躊躇し、それでも男をまっすぐと見つめ、言葉を放った。

「……王女殿下のご遺体がありませんでした。……恐らく連れ去られたかと」

若い騎士がそういうと、男は頭を抱え、どうしたものか、と考え込むように何も言わなくなった。

女性は両手で口元を押さえ、顔を俯かせた。

若い騎士はかなり居辛そうにその場に立っていたが、それでもきちんと立ち、自ら男に問うようなことはせず指示を待った。

二分くらい経ったころだろうか。男は抱えていた頭を上げ、若い騎士へと指示を出した。

若い騎士もきわめて冷静に男の指示を聞く体勢に入る。この若い

騎士は新人の騎士ではなく、もっと上の身分なのだろう。立ち振る舞いからもその様子が伺えた。

「確認するぞ」

「はっ」

男は若い騎士にその見た目にあった低い声で言った。

若い騎士も余計な行動はせず、片膝をつき、男の言葉を聞く。

「騎士が町へ着くと町が壊滅していて戦闘が行われた可能性があり、ティアの近衛騎士隊は全滅。しかもティアの遺体は発見できず、連れ去られた可能性が高いと。そういうことか」

男はそこで若い騎士へと視線を向け、騎士に言葉を促した。

「はっ。もし生きていたとしても……あの美しさから、既に奴隷商人へと売り飛ばされている可能性が高いと考えられます」

若い騎士は片膝を着いている体勢を崩さず、頭を下げたまま話す。それに男はしばらく苦々しい表情を浮かべてから、仕方ない、と諦めとも取れる表情を作ると若い騎士に命令を出した。

「……まずはその主犯格の盗賊団の情報収集と搜索。一個師団を投入するからお前たち搜索騎士隊はその指揮下に入れ」

そこで男は話を区切り若い騎士を見て、反応を待った。

無論、若い騎士はその男の行動を無視する訳がなく。

「はっ」

極めて普通に、失礼のない返答を返す。男はそれを気にした風でもなく、話を続けた。

「その後、周辺警備を強化。それもしくはは師団にやってもらって後で増援は送るからな。あそこはラルスタ帝国と国境が近い、手薄になると危険だ」

若い騎士は、その難しい言い回しに混乱したようなこともなく、全てを理解したように「はっ」と言った。

「……分かりましたが……王、ティスディア様はどうするのです？ 調べさせなくて良いのでしょうか」

しばらく間を空いた後、若い騎士は第二王女に対する対応を聞いた。若い騎士は言うのを迷ったようだが、意を決して王と呼ばれた男に言った。

王は少しの迷いもなく、若い騎士に少しの躊躇と共に言った。

「娘は……ティアは一番後で良い。最優先事項はすぐに町へ向かうことだ。これは出来るだけ早くしなければならない。常駐兵力がなくなったら今、すぐに騎士隊を送らなければならない。このことがラルスタ帝国に知られて、敵がなだれ込んで来る、など冗談ではないわかったな？」

「……はっ」

王の言葉は、暗にいらぬことに首を突っ込むな、と言っているようだった。

それを感じた若い騎士は少し気まずい気分になりながらも、最後はきっちりと返事をした。

「では、私は失礼します」

若い騎士はピシッと立ち、胸の前に右手を置く敬礼をした後、堂

々とした歩き方で、部屋を去った。

それを見送った王と呼ばれた男と、隣にいる女性は少しの間無言になると、女性は王に、小さな声で訊いた。

「……あの子はどうするのですか。もしかするともう一生会えないかも知れないですよ？ あなたは何も思わないのですか」

女性の問いに、王は顔を伏せる。
それを見た女性は、さらに問う。

「ねえ、なんとかならないのですか？ ねえ」

今にも泣き出しそうな顔で女性は問う。

その表情は我が子を心配する母親の顔で、慈愛に満ちた表情。
その女性の感情は分かっているようなのに、それでも王は強い意志で、女性に話しかける。

「……マリア、何事にも優先順位があるんだ。どうしても私は国を守らなければならないんだ。もちろん私だってティアを助けたいとは思っている。だが……居場所も分からず、果ては国外にいるかもしれない娘に、そこまで手を伸ばせない。私は、国民を守る義務がある。分かってくれ」

王はそうやってマリアと呼ばれた女性を説得しようとするが、マリアにはまるで効果がなく、逆にどんどんマリアは納得のいかなさそうな表情になっていく。

マリアはその美しい顔を俯かせ肩を震わせながら、王へと言った。
「……………あなたは分かっています。何も……………」

そして、マリアはもう耐え切れないとも言つように、身を翻し、顔を隠したまま部屋を出て行った。

王は引きとめようか迷うが、既に間に合わず。

マリアが出て行ったほうのドアを見つめるだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1974p/>

奴隷のガイアと王女さま。

2011年9月18日14時33分発行